

京都文化賞を受賞して

藤永太一郎*

文化とは何か？ 学問が消化吸収されて新たな発展をし、またその成果が人に周辺社会にその土地に体現定着したとき、それらを文化という。「従って皆さんはこれから大学で勉強するのは当然だが、学術の習得だけでは文化とはいえないし文化にはならない。」滋賀文化短期大学創立を手伝い初代学長として開学入学式に臨み、その式辞の中で文化をこのように定義してその大切さについて述べたのである。(注)

文化は人が創るので多様であり、地域依存的である。自信のある文化がある一方立派に見えても自信のないものもある。輸入したり後世模倣再建したりしたものは誇り得るものにはならない。フランスではアカデミーの賞は必ず新聞の1面に載るがノーベル賞は時に3面扱いになると聞いた。わが国フランスはヨーロッパの、従って世界の中心であって最も優れた文化をもっている、北欧など他国とは文化水準が違うとの自負によるものだそうである。日本人、京都人はどうであろう。筆者は20年に亘って生まれ育った神戸を出て昭和14年、京都に筈を解いたのだが当座 幾重にもカルチャー・ショックを受けたものである。先ず街では「3代以上 住んどいやさんと京都人とはいえまへん」と言われ、京都人の自文化への矜持を知らされると共に、生涯他所者である事を自覚したのであるが、その一方で他所者の北垣国道(知事)と田辺朔朗(後に京大教授)は協力して東山に疏水を穿って琵琶湖水を導き、京都に上水灌漑用水を供給すると共に水力発電して本邦初の電車を走らせるといった新京大文化を創造している。その他にもコンクリート造りの鳥居に丹塗り朱塗りの神宮を建て、高層ビルの壁面一杯に東郷青児が少女群像を画くなど近々数10年の京都人の所業に目をみはったものである。神社佛閣に象徴される千年をこえる古文化財の美事な保存継承と、先端科学芸術の創造とが美事に調和共存しているのであった。

文化には先ず、基礎になる学問がなければならない。1200年に亘って高水準の学術を保ち得た都市は尠い。次にその間休みなく文化の創造が続かなければならない。そして創られた文化は誇りをもって継承保存されねばならず、戦乱災害などによって散逸してはならない。このように考えると、アテネ、ポンペイ、洛陽などは終って了ったしニューヨーク、東京などは若すぎる。京都文化こそは長年高い学問水準に支えられ、その間休むことなく創造された文化が余すところなく保持継承されてきたパリの文化と並ぶ希な優れた存在なのである。

京大理化分析と海洋化学研究所は50年をこえる微量電気分析化学、海洋湖沼化学の研究を通して現代京都文化の創造に貢献してきた。その膨大な分析情報によってビワ湖ダム建設が断念され、代って環境保全によって京阪神の上水が確保される基礎を築いた、のはその一端である。私が文化賞受賞挨拶において「この賞を頂いたお陰で京都人の仲間に入れて頂けるのではないかと、有難く存じております」と述べたのは京都文化に対する最高の敬意をこめた謝辞であった。

(注) 広辞苑によれば、文化とは③人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果、とある。

*) (財) 海洋化学研究所名誉所長・京大名誉教授